

旧制中学校における内部限定メリトクラシー

——神戸一中生の成績・落第・退学の分析——

○井上義和（関西国際大学）

○岡本未央（神戸女子大学大学院）

橘 佳江（神戸女子大学大学院）

中村隆文（神戸女子大学）

0. 関心とねらい

本研究の目的は、旧制中学校における「メリトクラシーの内部限定説」を、兵庫県立第一神戸中学校の個票データを利用して検証することである。

同世代の多くが高等小学校までしか就学しなかった時代であって、旧制中学校に入学するには、いま以上に家庭環境（家業＋経済＋親の理解）が大きな制約になっていた。属性主義的な障壁は、卒業後の進路とあわせて、旧制中学校の入口と出口で立ちはだかっていたのである。では、旧制中学校内部での学業成績ではどうか。予備校や家庭教師など学校外部の教育産業が未発達な時代であって、学業成績はいま以上にメリット（能力＋努力）と直結していた——ように見える。しかしながら、メリトクラシー（業績主義的原理）がどの程度貫徹されているのかという問題は、属性主義的な障壁が（外見上）取り払われた制度環境においてこそ厳しく問われなければならない。

ただし、学業成績に関しては「障壁」という比喻は適切でないかもしれない。というのも、メリトグラシーというのは到達目標を共有するプレイヤー（または管理するマネージャ）の間ではじめて意味をもつのだからだ。旧制中学進学のための次第では「落第しない程度に勉強して卒業できればよい」という手抜き戦略が合理的な場合もありうる。メリトクラティックな見方からすれば脱落や淘汰として処理されてしまいそうだが、実際は長い人生の中で評価される必要がありそう。つまり、そうした勉強をめぐるドラマが出自や将来とどのように関わっているのかを知ることは、いままでも入口の選抜と出口の選択（出身→到達）の2局面から「障壁」の高さ（メリトクラシーの実現程度）を測定しようとしてきた枠組とは、また違ったリアリティに辿りつけるのではない。

※

山形県立鶴岡中学校を事例とした共同研究〔広田編2001〕は、凡そ次のことを明らかにした。旧制中学校における出自の影響は、入口段階では大きいものの〔広田・鈴木・高瀬1999〕、いったん入学した後は、内部での競争と淘汰のプロセスにおいては小さい〔河野1999〕。しかし、いったん落第すると、その後の進路に作用する出自の影響は再び大きくなる〔寺崎・吉田2000〕。すなわち、旧制中学校の内部では、そして内部に限っては、メリトクラシーが貫徹していた——。

本稿ではこれを「メリトクラシーの内部限定説」と呼ぶことにする。個票データを利用してこれを実証したのは、鶴岡中学の研究が最初である。

石川県立金沢第一中学校を事例とした井上好人の研究〔2005〕も、時期は異なるが明治27・42（1894・1909）年の卒業生に対して、この説の一部を検討している。それによれば、成績面では「族籍の相違というよりもメリトクラティックな要因が支配的」であり、「一旦入学してしまえば、族籍による卒業／退学率の差も、成績の差も認められず、明治後期の旧制中学校はメリトクラティックな要因に基づく格差が目立つようになる選抜機関であった」〔18頁〕としている。

本研究では、こうした旧制中学校の内部過程に限定したメリトクラシーについて、兵庫県立第一神戸中学校（以下、神戸一中）の個票データを利用して検証する。実際の分析は、次のような仮説に分解して進める。

- | | |
|--------------|-----|
| ①出自と進学率の関連 | …×？ |
| ②成績と進学率の関連 | …○？ |
| ③出自と成績の関連 | …×？ |
| ④出自と落第／退学の関連 | …×？ |
| ⑤成績と落第／退学の関連 | …○？ |

本稿は①～③の結果を示すにとどめるが、さらに、④⑤のあとには、落第者における出自と退学の関連⑥、退学者における出自と（成績と）退学理由の関連⑦などが検討される必要がある〔寺崎・吉田2000〕。

1. データと変数

分析対象は神戸一中の1905～19年入学コーホートである〔注1〕。以下の手順で作成した卒業生データベースと退学者データベースを使用する。

神戸一中の『参考簿』と同窓会名簿を利用して卒業生データベース（1910～24年卒業：1,504名）を作成する。記載者は卒業生に限定されるため、入学者のうち中途退学者は含まれない。出自の変数として【族籍】と【保証人職業】、到達の変数として【本人職業】を使う〔注1〕。卒業後の【進学】の有無（非進学・不明）も変数に入れた。

また『参考簿』に記載された個人別成績（各学年の素点と席次）を、各年の学年全員分の成績を一覧にした『各学年試験成績表』と照合しながら、1年級（1年修了時）と5年級（卒業時）の席次を確定した。これを河野〔1999〕にならって、次の手続により指標化

する。まず席次を学年全体人数で割って 100 掛けたものを【席順スコア】とする。100 人中の順位に換算（標準化）されるので比較可能になる【注 2】。次に席順スコアを 5 等分して、最上位層（ランク 1）から最下位層（ランク 5）までの 5 段階にカテゴリ化したものを【席順ランク】とする。また【落第経験】の有無も変数に入れた。

学業成績の分析には、半途退学者を含まない卒業生データベースを利用する【注 3】。それとは別に、入学者の『学籍簿』と、退学者のみを集めた『参考簿』を利用して、半途退学者だけのデータベース（686 名）を作成する。ここでは【族籍】【保証人職業】【退学理由】が分かる。さらに卒業生データベースと同様、1 年修了時と退学直前の学業成績、および落第経験の有無を追加した。この半途退学者データベースは、本発表の後半に、卒業生データベースと結合して使用する予定である（本稿では割愛した）。

近代実業都市である神戸・阪神間地域の産業構造を考慮して、旧中間層と新中間層という区分ではなく、実業セクター（会社員・商業・鉱工業）と非実業セクター（官公吏・教員・農業）という区分を採用した。また商業層の厚みを分析に活かすべく近代商と在来商に分類した【注 4】。

2. 分析(1)：出自・成績・進学率の関連

●出自と進学率の関連…（鶴岡よりは）弱い

卒業後の進路については、卒業後最初の校友会誌に進学先が記載されているものを「進学」、記載されなかったものを「非進学・不明」として扱った（その後進学したものもこのカテゴリに入る）。したがってここで算出された進学率は実際より過少に見積もられていることに注意が必要である【注 5】。表 1 をみると、鶴岡中と比較して、神戸一中は進学率が高く、士族と平民の差が小さい。ただし、明治後期（Ⅰ期）と大正前期（Ⅱ期）で比較すると、進学率は全体に上昇しているが、その伸びは士族が大きく、族籍間の差はむしろ広がっているようにも見える（それでも鶴岡中に比べれば小さい）。

表1 族籍別の卒業後進学率

族籍	N	Ⅰ期 1905-12	Ⅱ期 1913-19	神戸一中 1905-19入学	鶴岡中* 1911-24入学
士族	361	66.5%	76.0%	71.2%	68.8%
平民	1129	64.2%	70.6%	67.7%	61.1%
合計	1490	64.8%	71.8%	68.5%	63.9%

*鶴岡中のデータは河野[1999]による

親職（保証人職業）別ではどうか。表 2 をみると、鶴岡中の場合、官公吏・専門・教員の進学率が高く、農業・商業・鉱工業の進学率が低いので、新／旧中間層の間で進学アスピレーションの差が大きいことがうかがわれる。神戸一中では最も高い教員（77.9%）と 10 ポイント以上差があるのは農業（53.5%）だけである。

鶴岡中と比べて新／旧中間層の差が小さく、しかも大正期に限ってみれば、親職間で大きな差はなくなっている。

表2 親職別の卒業後進学率

親職	N	Ⅰ期 1905-12	Ⅱ期 1913-19	神戸一中 1905-19入学	鶴岡中* 1911-24入学
官公吏	109	73.8%	72.9%	73.4%	70.5%
教員	86	80.5%	75.6%	77.9%	75.3%
農業	71	44.0%	76.2%	53.5%	55.4%
会社員	412	64.6%	73.4%	69.9%	60.0%
近代商	218	64.8%	71.7%	68.8%	-
在来商	198	66.7%	73.5%	70.2%	54.7%
鉱工業	111	59.3%	70.2%	64.9%	57.2%
専門	83	62.8%	75.0%	68.7%	81.7%
無業	149	68.6%	68.4%	68.5%	62.1%
合計	1456	64.9%	72.3%	68.8%	61.3%

*鶴岡中のデータは河野[1999]による

「明治末以降の鶴岡中においては、生徒の卒業後の進路が、身分＝族籍よりも職業＝親職によってより強く規定されていた」[広田編 2001: 62 頁]。神戸一中でも、明治後期（Ⅰ期）には身分から職業へという変化が確認できるが、大正期（Ⅱ期）にはその職業の効果さえも小さくなっていく徴候が見て取れる。

●成績と進学率の関連…（鶴岡と同様）強い

進学率との相関が強そうなのは、学業成績である。ここでは卒業時の席順ランクに注目する（ランク 1 が上位で 5 が下位）。表 3 をみると、鶴岡中でも神戸一中でも、ランクが上位になるほど進学率が高くなるという傾向が確認できる。違いは、神戸一中の進学志向の強さは中位グループまで浸透しているという点である（神戸一中のランク 3 は鶴岡中のランク 2 に匹敵）。この傾向は、すでに明治後期から始まっていた。

表3 卒業時席順ランク別の卒業後進学率

ランク	N	Ⅰ期 1905-12	Ⅱ期 1913-19	神戸一中 1905-19入学	鶴岡中* 1911-24入学
1	291	88.1%	89.1%	88.7%	81.2%
2	300	80.3%	89.9%	85.3%	69.5%
3	300	70.4%	72.2%	71.3%	56.4%
4	301	49.6%	61.3%	55.8%	53.0%
5	301	37.9%	46.6%	42.2%	43.3%
合計	1493	64.7%	72.1%	68.5%	61.3%

*鶴岡中のデータは河野[1999]による

出自と進学率の関連は弱まり、成績と進学率の関連はとても強い。鶴岡中と比較して、神戸一中は、出自に関わらず進学志向が強く、実際の進学行動は成績によって規定される、という特徴がある。だとすれば、出自と成績の関連は弱いだろうと推測されるが、実際のところはどうかだったのか。

●出自と成績の関連…（鶴岡ほどは）弱くない

士族と平民について、1 年修了時と卒業時の席順ランク構成を、鶴岡中と比較できるようにした【表 4】【注 6】。河野[1999]は鶴岡中の結果について、「入学時点では若干、士族のなかに成績上位層の比率が高

い」ものの、(席順スコア平均値の推移も見たうえで)「族籍と学業成績のあいだにはほとんど関係がない」とした。神戸一中ではどうか。鶴岡とは逆に、士族の成績上位層の比率が低く、これは金沢一中の結果に近い[注6]。この理由を、井上好人は「士族の輩出率の高さ＝過剰入学、平民の輩出率の低さ＝過剰選抜」に求めている。それも重要な要因のひとつだろうが、おそらくそれだけではない(その訳はすぐ後で述べる)。いずれにせよ、士族が平民よりも成績優秀だったとは言えず、むしろ平民のほうが成績は良かった(席順スコア平均値でも確認できる[表5])。

表4 族籍別席順ランク構成の推移

ランク	士族(N=357)		平民(N=1119)	
	1年修了時	卒業時	1年修了時	卒業時
1	17.1%	14.0%	22.1%	21.1%
2	22.1%	21.0%	22.1%	19.8%
3	17.6%	21.3%	21.7%	19.7%
4	21.3%	24.1%	20.1%	18.9%
5	21.8%	19.6%	14.0%	20.4%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

参考 鶴岡中の場合:1911-24入学(河野1999より作成)

ランク	士族(N=258)		平民(N=615)	
	1年修了時	卒業時	1年修了時	卒業時
1	22.9%	22.5%	20.0%	20.7%
2	15.1%	20.2%	21.8%	22.4%
3	22.5%	17.4%	21.8%	21.1%
4	22.1%	23.3%	17.6%	18.7%
5	17.4%	16.7%	18.9%	17.1%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

表5 族籍別・親職別の席順スコア平均値

族籍	N	I期(1905-12)		II期(1913-19)	
		1年修了時	卒業時	1年修了時	卒業時
士族	361	51.8	53.3	52.1	52.5
平民	1129	43.6	50.6	48.8	48.9
官公吏	109	44.6	50.2	45.2	45.4
教員	86	33.9	41.5	47.5	47.0
農業	71	44.2	61.6	46.6	53.8
会社員	412	47.8	49.5	50.9	49.7
近代商	218	47.9	50.6	47.5	48.1
在来商	198	44.9	53.7	49.3	48.5
鉱工業	111	42.4	49.9	53.9	54.8
専門	83	46.2	52.1	44.9	47.2
無業	149	46.4	49.0	50.6	53.0

親職別ではどうか。まずは席順スコアの平均値で凡その傾向を読み取っておく[表5]。まず、族籍以上に親職間の成績の差が大きい。しかもこの差は、輩出率が高かった(＝過剰入学)であろう官公吏・教員・専門の新中間層グループと、輩出率が低かった(＝過剰選抜)であろう商業・鉱工業・農業の旧中間層グループとの間に広がっているわけではない点に注意が必要である。明治後期の教員出身者はダントツで上位グループを形成し、農業出身者は卒業時点ではダントツで下位グループに転落していた。そうした顕著な差異も大正前期には収束していき、官公吏・教員から農業・鉱工業まで、ゆるやかなグラデーションをなしている。とはいえ親職間の差異は、鶴岡中(河野[1999]のグラフ)と比較すると大きいようにも見える。

これを席順ランク構成の推移でみる。会社員・商業・鉱工業では分布の偏りはそれほど大きくない。

官公吏と専門も1年修了時はやや上位に偏っているものの卒業時には均等化されている。特徴的なのは、やはり教員と農業である。教員は一貫して上位に偏っている(約半数がランク2以上)。農業は1年修了時では上位に偏っていたのが卒業時には下位に偏っている(約半数がランク4以下)。

表6 親職別席順ランク構成の推移

ランク	官公吏(N=109)		教員(N=86)		農業(N=70)		専門(N=83)	
	1修	卒	1修	卒	1修	卒	1修	卒
1	22.0%	22.0%	32.6%	24.4%	24.3%	12.9%	20.5%	25.3%
2	28.4%	20.2%	15.1%	27.9%	25.7%	20.0%	27.7%	15.7%
3	17.4%	20.2%	23.3%	16.3%	18.6%	15.7%	19.3%	15.7%
4	17.4%	20.2%	20.9%	12.8%	14.3%	14.3%	15.7%	20.5%
5	14.7%	17.4%	8.1%	18.6%	17.1%	37.1%	16.9%	22.9%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

参考 鶴岡中の場合:1911-30入学(河野1999より作成)

ランク	官公吏(N=128)		教員(N=129)		農業(N=357)		専門(N=100)	
	1修	卒	1修	卒	1修	卒	1修	卒
1	21.1%	25.8%	24.8%	19.4%	19.0%	16.0%	28.0%	24.0%
2	23.4%	22.7%	14.0%	23.3%	21.8%	21.0%	22.0%	18.0%
3	18.8%	16.4%	24.8%	23.3%	19.9%	24.9%	20.0%	12.0%
4	18.0%	25.0%	15.5%	20.2%	19.3%	19.6%	14.0%	26.0%
5	18.8%	10.2%	20.9%	14.0%	20.2%	18.5%	16.0%	20.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

とはいえ、この偏りの程度をどう評価したらよいかというのは難しい問題である。なお、河野[1999]は鶴岡中について「席順の上位層から下位層まで、相応の比率のばらつきを含んでいたという事実のほうを重視しておきたい」と判断した。本稿でも、出自ごとの成績分布が予想外に均等であった事実を認めたくて、もう少し出自ごとの差異に注目したい。

●親職×成績×進学率

出自と成績の関連については判断を保留して、別の角度から検討してみよう。出自に関わらず進学志向が強く、かつ、進学行動が成績によって規定されるとしても、同程度の成績でも出自によって進学率が異なるのではないか。もしそうだとすれば、出自と成績の関連の「意味」もまた異なってくる(成績が良くなくても進学できる階層と、成績が良くなければ進学できない階層の違い)。

成績上位者(ランク1+2)と成績下位者(ランク3+4)の進学率を親職別で比較してみる[表7]。ここでも特徴的なのは、やはり農業と教員である。それ以外の職業集団の間に大きな差はない。すなわち、明治後期(I期)では、上位者の進学率は(農業57.1%を除き)概ね8割を超えているが、下位者の進学率は官公吏(6割)から農業・鉱工業まで(3割)ばらつ

きが大きい。大正前期（Ⅱ期）では、下位者の進学率は（教員 62.5%を除き）概ね 5 割台まで上がった。

表7 親職×成績×進学率

親職	成績*	Ⅰ期(1905-12)		Ⅱ期(1913-19)	
		N	進学率	N	進学率
官公吏	上位	25	88.0%	21	85.7%
	下位	26	61.5%	15	53.3%
教員	上位	24	91.7%	21	95.2%
	下位	11	54.5%	16	62.5%
農業	上位	14	57.1%	9	100.0%
	下位	26	30.8%	10	50.0%
会社員	上位	62	91.9%	93	93.5%
	下位	63	39.7%	89	53.9%
近代商	上位	39	87.2%	53	84.9%
	下位	37	40.5%	48	58.3%
在来商	上位	34	82.4%	46	89.1%
	下位	41	46.3%	42	57.1%
鉱工業	上位	21	81.0%	19	84.2%
	下位	21	33.3%	24	54.2%
専門	上位	16	81.3%	18	94.4%
	下位	20	50.0%	16	50.0%
無業	上位	31	80.6%	25	84.0%
	下位	26	50.0%	36	55.6%

* 席順ランク1と2を「上位」、3と4を「下位」とした。

●メリトクラシーの親職限定説？

以上、出自・成績・進学率の関連を検討した結果、教員と農業の振る舞いが「ハズレ値」を示した以外は、概ね、メリトクラシーの内部限定説が成り立ちそうである。明治後期の農業は、1 年時の成績はまあまあ良くて、卒業時にはかなり低下しており、さらに成績下位者はもちろん上位者の進学率も低かった（鉱工業も進学率が低かったが、成績上位者は高かった）。それが大正後期には、成績の低下は抑えられ、進学率も他集団に追いついたのである。他方、教員は、明治後期から成績が良く、進学率は一貫して高かった（官公吏も進学率は高かったが、成績は教員ほど良くなかった）。

高成績・高進学という「メリトクラティックなエートス」は教員出身者集団が先行して身につけており、明治から大正期にかけて他集団も高成績・高進学を目指すメリトクラシーの中で集団間の差異を縮減していくが、農業はそれに遅れて参入した——。教員と農業以外は似たり寄ったりだとするならば、これは「メリトクラシーの親職限定説」ということになるだろうか。この新たな仮説をも検証するべく、さらに落第／退学の変数を入れた分析を進めたい。

【注 1】「本人の職業」については神戸一中同窓会名簿 1943 年版（会誌 47 号）を使用した。分析対象である 1905～19 年に入学した 15 年分のコーホートがほぼ 40 歳代のときの職業が分かる（ただし約 20%が死亡、約 16%が所属先空欄）。

【注 2】席順スコアの分母は同期の落第者（原級留置）を含む全体数であり、そこには後で退学した者も含まれる。したがって分析対象を卒業者に限定する場合には、席順スコアの平均値は 50 より小さい値を示す。

【注 3】河野〔1999〕は「技術的な理由により」中退者と編

入者を分析から除外している。学業成績の分析から中退者を除外するのは本稿も同じであるが、卒業者の中には（無視できない数の）2 年級以降の編入学者を含む。その場合、1 年修了時の代わりに編入初年修了時の席順データを使用した。

【注 4】実業セクター／非実業セクターという区分と近代商／在来商という分類については、井上義和〔2005〕を参照のこと。簡単に言うと、神戸一中では（新中間層化というよりも）セクター内部での再生産の傾向が強い。在来商は明治以前から存在するいわゆる在来業種、近代商は明治以降に新しく登場した、または近代化過程で再構築された業種である。この分類が（経済史研究でも何度も試みられながら）論争的な問題を孕んでいることは承知のうえで、近代／在来の差異を分析的に浮かび上がらせるために敢えて採用した。

【注 5】鶴岡中の進学者同定の手続については広田編〔2001：65 頁注 11〕を参照のこと。上級学校進学（校友会誌）だけでなく最終学歴（同窓会名簿）の記載があるものまで含む。したがって、鶴岡中との比較のうえでも、本稿の神戸一中の進学率は過少に見積もっている。

【注 6】河野〔1999〕は 6 時点（入学時・1 年修了時・2 年修了時・3 年修了時・4 年修了時・卒業時）の席順ランク構成の推移を検討している。本稿は資料的制約もあり、入学 1 年後と卒業直前の 2 時点のみを比較する。

【注 7】井上好人によれば、金沢一中における卒業時の席順ランクは「上位層（ランク 1 と 2）が 36%、下位層（ランク 4 と 5）が 44%であるのに、平民は上位層が 41%、下位層が 39%」であり、明治後期の間、この傾向に大きな変化はない。〔2005：18 頁〕。

【付記】本研究は兵庫県立神戸高等学校からの資料提供と、神戸女子大学の院生・学生によるデータベース化作業に依拠している。関係各位に感謝いたします。

【文献】

- 広田照幸編、2001、『近代化過程における中等教育の機能変容に関する地域間比較研究』科研費補助金研究成果報告書
- 井上義和、2005、「近代実業層は進学名門校をどのように利用したか—旧制神戸一中卒業生の個票データの分析から—」科研費補助金研究成果報告書『近代化過程における教育政策と産業・労働政策の整合—葛藤』（研究代表者：広田照幸）、第 10 章
- 井上好人、2005、『近代日本における地方名士の形成—北陸地方の中等教育からみた社会移動分析—』科研費補助金研究成果報告書
- 河野誠哉、1999、「旧制中学校の内部過程における学業成績の実態に関する研究—山形県鶴岡中学校を事例として—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』39 巻（広田編第 4 章に収録）
- 寺崎里水・吉田文、2000、「落第と『半途退学』にみる旧制中学校の社会的機能—山形県鶴岡中学校を事例として—」『教育社会学研究』66 集（広田編第 5 章に収録）